慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズの書翰に現れたる其の「経済学理論」
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.9 (1929. 9) ,p.1312(116)- 1333(137)
JaLC DOI	10.14991/001.19290901-0116
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290901-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズの書翰に現れたる其の「經濟學理論」

高橋誠一郎

一

ウイリアム・スタンリー・ジェヴォンズ（William Stanley Jevons）が初めて經濟學に興味を持つに至つたのは、一千八百五十七年の頃であつた。彼れの生誕は一千八百三十五年九月一日であるから、彼れは當年正さに二十二才の青年であつた。彼れが年未だ十九に滿たずして、將さに濠洲シドニイに建設せられんとす新造幣局の試金官に任命せられ、次いで此の地に渡航してから、三年の歳月が過ぎてゐた。彼れは此の年七月十七日附を以つて其の妹ヘンリエッタ（Miss Henrietta Jevons）に書き送つて云ふ「私が此の六ヶ月間に於いて、最も心を用ゐた問題は、經濟學である。あなたは、あなたが之れを學修した後でなければ、それが何を意味するかと云ふことも、又たそれが何であるかと云ふこともお判りにならないであらう。然しながら、之れに携つた者に取つては、それは其の反對に頗る興味あるものである」と。（Letters & Journal of W. Stanley Jevons, edited by his wife, 1886, p. 89）。

翌五十八年二月二十八日、ジェヴォンズは更らにヘンリエッタに與へて云ふ「私はあなたが經濟學を以つて、それほど惡くないものとお認めになつたことを喜ばしく思ふ。「國富論」は恐らく此の問題に關する最も乾燥なるものゝ一つであらう。あなたは、科學的に言へば、「經濟學」が頗る狹縮せられたる科學であることを會得するであらう。それは實に人間の勤勉の原因及び結果を算へ、而してそれが最も善く適用せられ得る方法を示す不定なる數學の一種である。人間の狀態と關係のある多數の結び附いた知識の諸部門が存する。是れ等のものゝ經濟學に對する關係は、機械學、星學、光學、音響、熱及び其の他幾分物理科學に屬する凡ゆる部門の純粹數學との關係に類似する。私は一の考へを持つてゐる、私は之れをあなたに申し上げることを否まない。即ち其れは、人間の知識の基礎及び本質に對する、私の

洞察が大多數の人々若しくは著者の其れよりも深いと云ふことである。洵に私は、斯くの如き問題に專念するは私の使命であり、又た斯くすることが私の意圖であると思ふ」と。（ibid., p. 101.）。

彼れは初め就任の際、六百七十五磅の年俸を提供せられ、而して其の姉ルッシイに於いて年收一千磅乃至二千磅を得る確かな豫想を持つことが出來たに拘らず、更らに知識的啓發の機會を得んとする彼れの緊切なる欲求は、其の金錢欲、安樂欲、地位欲に打ち勝つた。（Cf., ibid., p. 110.）。彼れは一千八百五十九年英國に歸つて、再び倫敦ユニヴァシチイ・カレッヂに入學した。

二

彼れは一千八百六十年六月に至るまでに、既に其の主要なる經濟理論を發見した。彼れは同月一日附を以つて其の兄ハーバート（Herbert Jevons）に書を寄せて、此の事を告げてゐる。而して一度び自己の發見せるものが、疑問の餘地なき「眞の經濟理論」（the true Theory of Economy）なることを確信せる彼れは、最早憤りを感ずることなくして、他の經濟書を讀むことを得ざるに至つた。彼れは數學的原則からして、經濟學者が先きに到達せる總べての主たる法則を取得した。最も重要なる公理の一は、或る人の消費せざるを得ざる或る一定貨物、例へば平常の食物の數量が增加するに連れて、使用せらるゝ最後の部分より生ぜしめらるゝ效用若しくは利益は、其の程度に於いて減少すると云ふに存する。食事の初めと終りとの間に於ける享樂の減少は、之れが例證たらしめられ得るものである。而してジェヴォズは、均しく、效用の割合（ratio of utility）は、貨物の數量の或る連續的なる數學的函數であることを推定する。此の效用の法則は、洵に、經濟學者によつて「供給及び需要の法則」なるより複雜なる形態と名稱の下に常に推定せられて來たものである。然しながら、そは一度び其の單純なる形態に於いて十分に述べられたならば、有效に斯學の全部を解明する。彼れは言ふ、結論の多くは、勿論、矛盾なき形態に於いて述べられた古いものである。「然しながら、資本に關する私の定義及び資本利子の法則は、私の知れる限りに於いては、全然新しいものである。私は、是れ等のものを其の儘に放つて置いて、或る他の者が之れを知らされざるに知り、從つて又た翌春是

れ等のものを公表せんと試むるを甘んじて待つが如き考へを持つものではない」と。(ibid., pp. 151-152.)。

同年一月二十七日附ハーバァート宛の書簡中に於いて云へる如く、經濟學には、一ヶ年三十磅三ヶ年間の奬學金が附してあつて、之れに對する競爭が此の年の末に行はれることに爲つて居つたが爲めに、ジェヴォンズは一層經濟學の研究に多くの時間を割いた。(ibid., p. 150.)。然しながら、此の年七月二十五日附ハーバァート宛の書簡は、彼れが其の成績の上で、慮はざる敗北を取つたことを物語つてゐる。獨立獨創的に經濟學を研究し、斯學上に於ける幾十の最良書を讀破し、之れが爲めに殆んど他の課程を顧みなかつたに拘らず、第一位を贏ち得可しと爲すの信念は無殘に裏切られて彼れは第三位若しくは第四位に置かれたのであつた。彼れは斯くの如き結果を見たことを以つて、偏へに、意見の相違によつて、教授が彼れの答案に對して片手落な態度を取つたが爲めであると感じた。彼れ曰く、「然しながら、私が自己の『經濟理論』を公にし、感覺的基礎の上に斯學を再建するの時、私は十分に仇を報ゆるであらう」と。(ibid., p. 154.)。

而も彼れは此の年にバチェラー・オブ・アーツの稱號と、リカードオ奬學金とを得た。而して何人かゞ自己の發見に先鞭を著くることを常に惧れて居つた彼れは、其の經濟理論を Notice of a General Mathematical Theory of Economy. と題する小論文に認めて、一千八百六十二年十月劍橋に於いて其の第三十二回の集會を開く筈に爲つて居つた英國協會 (British Association) に提出した。「私は此の論文が恐らく、同會に於いて朗讀せらる可き他の總べてのものを一緒にした値打のあることを、可成りによく知つて居るのであるが、而も私は其れが如何に受入れられるか――其れが畢竟朗讀せられるであらうか如何か、又た其れが無意味な譫語と考へらるゝことはないであらうか如何かを豫言することを得ない。私は洵に私の理論が私の友人等及び一般世界の上に如何なる效果を有するであらうかを知らんとするの念が切である。私は、其の結果が彼れの企圖した所と等しいか如何かを知らうとして砲手が砲彈の飛んで行くのを見守る樣に之れを見守るであらう」。(一千八百六十二年九月十四日附ハーバァート宛書簡 op. cit., p. 169.)。彼れの氣遣つた結果は如何あつたか。同年十二月三十一日の日記に於いて、彼れは僅かに五分間内に終

らんとする此の年を追懷して言ふ、此の年は「私の希望の多くが滿され、其の多くが破られたことを見た。此の年は私をしてマスター・オブ・アーツたらしめた。此の年は私の經濟理論が一學術研究會(?)に提出せられ、而して所信若しくは興味ある一語もなくして受納せられたるを見た」と。(ibid., p. 175.)。(cf., Report of the Associations for 1862, "Transaction of Sections," 1863, pp. 157-8; Brief Account of a General Mathematical Theory of Political Economy—Journal of the Statistical Society of London, June 1866, vol. xxix., pp. 282-7.)。

正規的な仕事と安定なる收入の豫想に誘はれて、ジェヴォンズはマンチェスターのオーエンス・カレッヂ Owens College)のチュターの職を引受くるに至つた。(一千八百六十二年十二月三十一日日記參照 op. cit., p. 174.)。六十三年八月二十三日附ハーバァート宛の書簡は、當時彼れが猶ほ孜々として論理學及び經濟學の四十回講義の準備に努力しつゝあつたことを物語つてゐる。(ibid., p. 189.)。彼れは一千八百六十六年に同カレッヂに於ける論理學並びに精神及び倫理哲學教授と爲り、又たコブデン經濟學講座を擔任した。爾後、凡そ三四年間、ジェヴォンズの思索は主として論理學に向つて居つたのであるが、一千八百七十年から七十一年に亙る冬期に於いて、經濟學に對する彼れの興味は甦つた。彼れは此の期間を擧げて、彼れが一代の名著 The Theory of Political Economy. の著作に盡瘁した。彼れの業は速かに進捗して「經濟學理論」は一千八百七十一年十月を以つて出版せらるゝに至つた。而も此の書述作の間に於ける不斷の努力が彼れの健康を害するの因を爲したことは、後に思ひ知らるゝ所と爲つた。(Letters & Journal, op. cit., pp. 251, 253.)。此の著の主要なる點は、既に約十年以前に劍橋に於ける英國協會の集會に於いて朗讀せられたる前記論文中に略説せられ、一千八百六十六年に倫敦統計協會雜誌誌上に公表せられた所のものである。

三

ジェヴォンズは洵に經濟學上に於ける勇敢なる叛逆者であり、又た正統派經濟學者に對する異端者であつた。彼れは其の著に於いて誇らかに言ふ「考察と研究の反復は、余を導いて、價値は全然效用に依賴すると云ふ、稍や新奇なる意見に到達せしめた。現在行はれつゝある意見は、效用よりも、寧ろ勞働を以つて價値の起源

と做してゐる。而して、明確に、勞働は價値の原因であると主張する者すら存する。余は、之れに反して、交換の滿足なる理論に到達する爲めには、吾人は單に、吾人の領有する貨物の定量に依賴するものとして、效用變化の自然法を周到に探究す可きものであつて、通常の供給及び需要の諸法則は之れが必然の結果たることを明かにする。此の理論は事實と一致する。而して勞働が價値の原因であると云ふ信念に對して、何等かの外觀的理由の存する處に在つては、常に吾人は其の理由の說明を得るのである。勞働は、供給の增加若しくは制限を通じて、貨物の效用の程度を變ずるに由つて、唯だ間接の方法に於いてのみ、屢々價値を決定するものと認められる」と。（The Theory of Political Economy, 4th ed., 1911, pp. 1-2.）。而して彼れがリカードオに對する態度は、極めて苛酷であつた。曰く「遂に經濟學の眞體系が建設せらるゝに至つたならば、有爲なるも、而も執迷の人、デヴィッド・リカードオが誤れる進路に車を引き入れたことが明かと爲るであらう」と。（ibid., p. lii）。

然しながら彼れの理論は彼れ自己が想像した程、彼れに獨自なるものではなかつた。彼れの理論は既に一千八百五十四年の交に於いて、ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン（Hermann Heinrich Gossen）によつて完全に先鞭を著けられ、而して彼れよりも稍や遲れて一千八百七十四年レオン・ウルラス（Léon Walras）によつて全然獨立に發見せられ、而して更らに完全なる體系に組成せられたるを見たる時、何人よりも先づ驚きの眼を見張つたものは、恐らくジェヴォンズ其の人であつたであらう。

ジェヴォンズは、ワルラスから其の研究論文（Principe d'une théorie mathématique de l'échange—Mémoire lu à l'Académie des sciences morale et politique—Séances des 16 et 23 août 1873.）一部と鄭重なる書簡とを受くるに先立つて、既に Journal des Économistes. 誌上に於いて彼れの理論を注意して居つた。彼れは一千八百七十四年五月十二日附を以つてマンチェスターから、ローザンヌのワルラスに返書を認めて、彼れ自身の交換の理論が實際上ワルラスの攻究に依つて確證せられたることを喜ぶ旨を述べ、彼れはワルラスが該問題に關する彼れの著を知れるや否やを明かにせざるも、其の數學的理論の主要なる點は悉く一千八百六十二年に至るまでに彼れの體得せる所であつて、彼れは既に同年其の概略を誌して英國協會に提供し、同會の報告は其の極めて簡短なる拔萃を掲載するに過ぎないが、原論文は六十六年、倫敦統計

協會雜誌中に公にせられたることを述べ、最後に彼れは七十一年「經濟學理論」と題するオクタヴォ判一卷を書肆マクミラン會社より出版し、其の中に於いて、數學的記號の援助を借りて其の理論を充分に說明せる旨を述べて、暗に自己の優先を主張してゐる。而して彼れはワルラスが未だ此の書に氣附かずに居るならば、彼れは欣んで其の一部を贈呈す可きことを附言してゐる。「記號は別樣に選擇せられ、又た偶發的相違は存するも、而もあなたの理論が實質上私のものと一致し、且つ私のものを確認することをあなたは看出すであらうと私は思ふ」。ワルラスの謂ゆる「貨物の「稀少性」(rareté) は正さに、ジェヴォンズが初めに「效用の係數」(coefficient of utility) と稱し、後に「效用の度位」(degree of utility) と呼べる所のものであるやうに見える。而してそは事實、貨物の定量の函數として考察せられたる效用の「微分係數」(differential coefficient) である。彼れはワルラスの論文の出版を喜ぶものであるが、而も是れによつて其の理論の獨創と其の公表の前後に關して誤解を生ずるのを虞れあることを憂へて、ワルラスが彼れの著作を十分に知悉せるや否や、又た彼れが其の「經濟學理論」の一部の送付を希望するや否やを知らんことを欲した。(Letters & Journal, op. cit., pp. 303-304.)。

ワルラスから其の Éléments d'économie politique pure, ou théorie de la richesse sociale. の見本刷の一部を送られたジェヴォンズは、一千八百七十四年五月三十日附を以つて彼れに書を寄せて、兩者が獨立の道を取つて、縱令ひ全然同一ではないとしても、殆んど同一なる結論に到着せるを發見するの喜びを述べ「我れ等の結果の一致は、最良なる原因、即ち我れ等が共に眞理に到達せるの事實から生じたものである、眞理は一つならざるを得ない」と說いてゐる。彼れはワルラスの五月二十三日の書簡を受取り、彼れが交換の方程式に到達せる態樣を知悉せる後は、彼れ自身の研究が全然獨立のものであることを毫も疑ふことを得ざるに至つた。而して彼れはワルラスが一千八百六十六年の「統計雜誌」に載せられた彼れの理論の梗概を見たゞけで、直ちに二三の點に關する彼れの優先を承認せることを德とした。ジェヴォンズは「交換」の理論が彼れ等兩者の間に於ける多くの親しい手紙の「交換」の端緒たらんことを信ずる旨を述べて其の筆を擱いてゐる。(Letters & Journal, op. cit., pp. 305-306.)

四

一千八百七十七年二月二十八日ワルラス宛の書簡は、ジェヴォンズが是れより也數週以前、初めてエチエン・ジュ・デュピュイ（Étienne Juvenal Dupuit）が一千八百四十四年に Annales des Ponts et Chaussées. に掲げた Mémoire de la Mesure de l'utilité des Travaux Publics. を讀むの機會を得たることを物語つてゐる。彼れはデュピュイが效用の根本觀念に關して、彼れ等に先鞭を著けたるも、而も彼れは交換の理論に到達せざりしことを述べ、而して、デュピュイの發表せる所のものが、經濟學者の上に影響を及ぼすこと尠少であつて、其の大部分は之れが存在をすら知らざりしことを奇としてゐる。（Letters & Journal, op. cit., p. 366.）ジェヴォンズは又た翌一千八百七十八年四月三日附ブルーアー（W. H. Brewer）宛の書簡に於いて、デュピュイの研究論文に言及し、之れを以つて最も光輝あり且つ貴重なるものなりと做し、彼れは主として其の觀念を通行稅、橋梁等に適用せるものであるが、彼れは價値の理論に關し、全然正確なる總念を有せることを述べ、斯くの如き著作が如何にして等閑に附せられたるかを訝つてゐる。（ibid., p. 384.）。而してジェヴォンズは一千八百七十九年の The Theory of Political Economy. 第二版の序文中に於いて、デュピュイが、幾何學的圖式によつて見事に、且つ完全に說明せられたる「效用の差等」（gradation of utility）の理論を建設せることを述べ、這般の理論は疑ひもなく彼れの「經濟學理論」中に收められたるものと本質に於いて符合することを認めてゐる。（ibid., 4th. ed., pp. xxix.）。

五

然しながら之れにも增してジェヴォンズを驚かしたものは、ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン（Hermann Heinrich Gossen）が早く一千八百五十四年にブラッシュワイッヒに於いて出版した Entwickelung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handeln. の發見であつた。彼れの友人にしてオーエンス・カレッヂの哲學教授ロバート・アダムサン（Robert Adamson）はカウツ（Julius Kautz）の Theorie und Geschichte der Nationalökonomik. 第一部 Die Nationalökonomik als Wissenschaft, 1858. 中に簡短に、ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンと名乘る一獨逸人の手に成れる快樂及び苦痛の理論を包含すると稱せられた一書に言及しつゝ

あることを數年以來知つて居つた。（Kautz, a. a. O., S. 9.）。アダムサンは廣告して此の書を求めたのであるが、一千八百七十八年八月に至るまでは此の書を見ることが出來なかつた。然るに此の月に彼れは幸にも一獨逸書肆の目錄中に於いて此の書を發見して、之れを購ふことが出來た。獨逸語の知識を缺いて居つたジェヴォンズはアダムサンから此の書の內容の報告を受けた。（Jevons, Theory, op. cit., p. xxxiii.）。

「私は最近數日內に、オーエン・カレッヂのアダムサンによつて、一見私の理論と著しく類する經濟學の理論を收めつゝあるゴッセンと稱する人の手に成つた未知の獨逸書が發見せられたことに於いて、寧ろ嫌はしい出來事に逢着した。洵に、私の理論の主要觀念を豫示せる、大陸に於いてすら是れ迄、全然知られなかつた書籍の全系が存してゐる。是に於いて乎、過半數の人々は私の理論を以つて無意義と思惟して、之れを理解するとなく、而して爾餘の人々は之れが斬新に非ざることを發見すると云ふ不幸なる地位に私は在るものである」と悲しげに彼れは其の弟トム（Thomas Edwin Jevons）に與へた七十八年八月二十一日の書簡中に誌してゐる。

而して彼れが其の著新版の業は遲々として進行しなかつた。（Letters & Journal, op. cit., pp. 387-388.）。彼れは又たフォックスウェル（H. S. Foxwell）に對しては九月一日、ワルラスに對しては同月二十日附を以つて、ゴッセンの著の發見を報告してゐる。（ibid., pp. 389, 390.）。

ジェヴォンズは、前述せるが如く獨逸語の知識を缺いて居つたが爲めに、ゴッセンの書を讀むことを得なかつたのであるが、アダムサンが彼れの爲めに書いてやつたり、讀んで聞かせた所と、此の書の記號的部分及び圖式の檢討とから判斷して、ゴッセンが計算を簡單ならしむるが爲めに、經濟的函數が直線の法則に從ふことを推定し、斯くて彼れの效用曲線は概して直線として取扱はるゝの事實を擧げて之れを難じ、又たゴッセンはジェヴォンズが其の書中に於いて設定せるが如き交換の方程式に眞に到達せるの觀なきこと、資本及び利子の理論を缺きつゝあること、並びに共通なる眞理の基礎より發生するが如き底のものを除いては、問題の解明の間に全然何等の類似も存せざることを指摘してゐるが、而も兩者の體系の主要觀念の一致が極めて顯著なることを述べ、而して彼れが一千八百七十八年八月に

至るまで、斷じてゴッセンの書の存在を知らざりしことを說き、其の理由として、彼れが獨逸書を讀むの力を有せざりしこと、及びゴッセンの著書が獨逸に於いてすら殆んど知らるゝことなかりしの事實を擧げてゐる。斯くの如き事情の下に於いては、彼れがゴッセンの著を發見するよりも、寧ろ快感及び不快の理論を發見することの方が遙かに確からしかつたのである。ジェヴォンズは率直に言ふ「私は優先權に就いて全然無關心であることを主張するを得ない。而して私の理論が初めて簡單なる梗概の形に於いて公にせられた一千八百六十二年以來、私は私の理論が同時に新奇にして又た重要なる理論であると思惟して悅に入ることが屢々であつた。私が今此の序文中に述べた所によつて、新奇は最早此の理論の主要なる特色に屬せしめられ得ないことが明かである。多くのものは明かにデュピュイに歸す可きものであり、又た殘餘のものゝ中から大きな分前はゴッセンに割當てられなければならぬ。彼程に傷ましく閑却せられて居つたものを理解せしめ尊重せしむるに於いて結局私が成功するならば、失望は容易に滿足の中に消え去るであらう」と。（Theory, op. cit., pp. xxxv-xxxviii.）。

其の著が二十年間の默想の結果に成つたものであつて、コペルニコス（Kopernikus）が空間界に對して行へる所のものを彼れは人間界に對して行へり（Entwickelung, a. a. O., Vorrede, S. v.）と主張せるゴッセンは不遇の裡に一千八百五十八年に儚なく世を終つたのであるが、ジェヴォンズは其の「理論」第二版の序文起草の當時に於いては固より、彼れが猶ほ生存しつゝあるや否やを知ることなく、又た彼れに關して殆んど何事をも知ることがなかつた。然るに其の後レオン・ワルラスはジェヴォンズに與へたる書中に於いて、彼れがジェヴォンズの生涯に就き二三詳細なる事實を知り得たる旨を傳へた。ジェヴォンズは八十一年七月二十日附を以つて、ワルラスが自ら之れを公にするか、若しくは之れを彼れに送つて、彼れをしてワルラスの名を以つて或る英國の雜誌に之れを公表せしめんことを望んでゐる。（Letters & Journal, op. cit., p. 431.）。

六

ジェヴォンズは一千八百七十四年に劍橋に於ける精神及び倫理科學優等試驗委員の一人に任命せられた。彼れは此處に久しく經濟學の數量的理論の總念を

抱懷せる」彼れよりも七つ若い少壯學者と邂逅した。此の少壯學者こそアルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）であつた。（一千八百七十五年二月七日附フォックスウェル宛ての書簡參照。Letters & Journal, p. 331.）。マーシャルは、一千八百六十八年以來セント・ジョーンス・カレッヂに於いて、倫理科學を講じて居つた。而も彼れの研究の出版は延び延びに爲つて居つたのであるが、一千八百七十九年に及んで漸く The Pure Theory of Foreign Trade. The Pure Theory of Domestic Values. がプライヴェートリーに刊行せられた。是れ等のものゝ案は一千八百六十九年から七十七年に至る間に立てられたものである。而して同じ年に彼れと其の夫人（Mary Paley）との合著 The Economics of Industry. が出版せられた。

ジェヴォンズは此の年十一月十四日附を以つてフォックスウェルに與へた書簡中に於いてマーシャルに言及し「勞銀及び地代の法則の類同に關しては、固より私はマーシャルが一千八百六十九年に於ける其の講義中に於いて述べた所のものを知らない。／私は彼れの講義に出席したこともなければ、又た其の筆記を見たこともない、尤も或る受驗者の答案の中に之れが述べられてゐれば別だが、私は彼れ等が此の問題に關して何物かを言へることを記憶しない。（中略）。「マーシャルの獨創に關しては、私は目的をも理由をも有せざるが故に、嘗つて聊かも之れを疑ふことがなかつた。他方に於いて、貴郎は私の理論の主要なる諸點が既に遠く一千八百六十二年の交に於いて劍橋に於ける英國協會の集會に於いて十分に表示せられたることを忘れたやうに見える。私はマーシャルが私の最初の短論文の或る印刷せられた報告を見たと想像すべき何等の理由をも持たない、而も固より他方に於いて一千八百七十一年の私の著書（Theory of Political Ecoromy.）中に於いて、私は能くマーシャルから何物をも借りることは出來なかつた。然しながら吾人は既にゴッセン、クールノー、デュピュイ等の著書の如き更らに早き著書を發見せる故に、斯くの如き問題は今は事實上殆んど何等の重要性をも有せざるものである。優先の問題に關しては、我れ等は總べて資格を失つたのである。固より細目及び一般の說明法等に關する外は」。而して彼れは勿論マーシャルの書を所持するも、當時他の方面の思索と勞務とに忙はしくして、事實、未だ之れを熟讀することを能はざる旨を述べてゐる。（Letters & Journal, pp. 408-409.）。

後年、アッシリー（W. J. Ashley）の謂ゆる「リカードオの名譽恢復（rehabilitation）」を圖り、一方に於いてジェヴォンズの事業が、リカードオを除いては、最近百年間に行はれた如何なるものよりも大なる構成力を有することを認むると共に、他方に於いて彼れが其の先輩リカードオ及びジョン・スチュアート・ミル（ジェヴォンズの語を以つてすれば、リカードオと等しく「有爲にして執迷なる其の讃美者」）を論ずること苛酷に過ぐるものあるを說き、彼れが「考察と研究との反復は、余を導いて、價値は全然效用に依賴すると云ふ稍や新奇なる意見に到達せしめた」云々と道破せるの時、そは、不注意なる約言を以つて價値を生產費に依賴するものと做せる舊經濟學者の意見よりも、却つて一方的なることを主張せるものは、實にアルフレッド・マーシャルであつた。（Marshall, Principles of Economics, vol. 1, 5th ed., 1907, p. 817.）。而して彼れの見解に據れば、リカードオは微分學の簡單なる語法に就いて無識であつたが故に、彼れは「總じて供給の抑制によつて限界效用は上昇し、全部效用は減殺せらるゝ」と云ふが如く巧みに之れを言說す可き正しい言辭を掴むことがなかつたとは云ひながら、リカードオは其の全論述を通じて之れを言はんと試みつゝあつたのである。（ibid., p. 814.）。

少壯經濟學に志し、幾許ならずして自己の洞察の他に比して深きを認め、曠世の大經濟學者等の迷妄を嘲り、軈がて自己の構成し得たる理論の獨創と斬新とを誇り、只管其の表明が他に優先せらるゝを惧れたるジェヴォンズが、其の主著出版の後に於いて、ワルラスの出現、デュチュイイ及びゴッセンの發見、マーシャルの擡頭によつて、其の自信と自負との幾分を失ひ行きつゝあるの有樣は歷然として其の私信の上に現れつゝあるのである。